

沖永良部島民のアイデンティティと政治の歴史

著者	高橋 孝代
雑誌名	沖縄文化研究
巻	29
ページ	323-377
発行年	2003-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015909

沖永良部島民のアイデンティティと政治の歴史

高橋 孝代

I はじめに

沖永良部島は沖縄島の最北端辺戸岬から北東に約六〇キロ、鹿児島市から南西に約五四〇キロの位置にあり、和泊^{わどまり}、知名^{ちな}の二町からなる人口一五、一二三人（二〇〇一年八月現在）の島である（図1参照）。沖永良部島は、地理的に沖縄島と日本本土の間にあり、歴史的に両地域からの政治的影響を受けてきた。沖永良部島は一四世紀以降の三山時代^①は北山王の勢力下であり、一五世紀初め三山が統一され王朝が形成された後は琉球王国に属した。一六〇九年の薩摩藩による琉球侵攻後、沖永良部島は薩摩藩直轄領となり薩摩藩より遣わされた役人が島を治め、その一方で中国からの冊封使渡

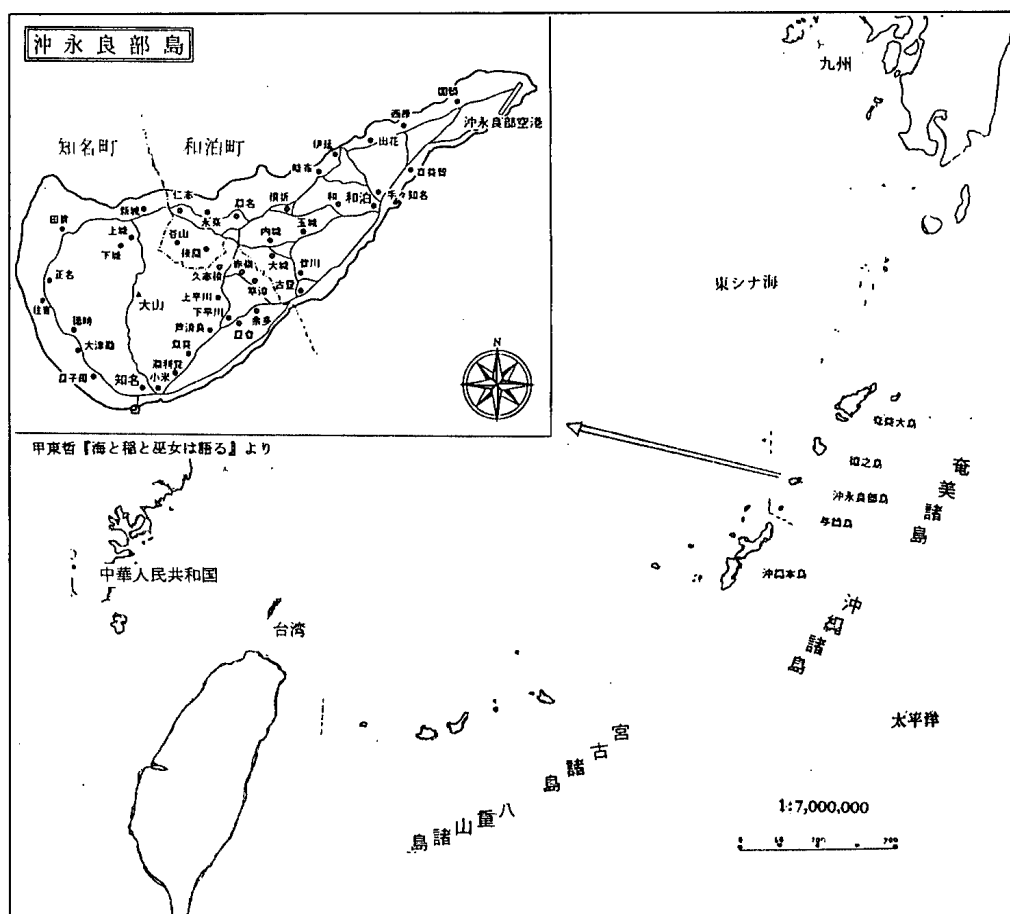


図1 沖永良部島の位置

琉の際は琉球王国に対し食料支援を行うなどの関係は継続した。明治期になり代官政治は終わり、沖永良部島は次第に近代県政に組み込まれていった。沖永良部島は明治五（一八七二）年に鹿児島三九大区となり、明治八（一八七五）年には大島支庁がおかれ、明治一二（一九七九）年に鹿児島県大島郡の一部となった。第二次世界大戦後は沖縄県および他の奄美諸島とともに米軍施政権下におかれた。その後、日本へ「復帰」するため激しい運動を展開し、昭和二八（一九五三）年には昭和二〇（一九四五）年から続いた七年一〇ヶ月間の米軍施政権下の時代に終止符が打たれ、戦前と同様に鹿児島県大島郡に属することとなった。

沖永良部島の「沖縄」と「鹿児島」の行政的、文化的「境界地域」に位置するという地理的環境と双方からの政治支配は島に住む人々のアイデンティティにもさまざまな影響を及ぼしている。例えば、政治支配の時代を反映し、沖永良部島には沖縄系の人々の子孫や鹿児島系の人々の子孫がおり、多くの場合それらの人々は各々の出自をアイデンティティの拠りどころとしている。沖縄系出自には「永良部世の主」の子孫を名乗る親族集団が、また鹿児島系出自には「先祖は薩摩の〇〇代官である」と薩摩藩役人の出自を始祖とする親族集団が存在し、家系図を作成するなど、祖先の出自への関心は高い。出自は、人々のアイデンティティを形成する要素になっており、その出自に基づくアイデンティティは沖縄あるいは鹿児島への帰属意識に関連している。本稿では、沖永良部島のもつ「境界性」と政治的な歴史が人々のアイデンティティにどのような影響をおよぼしているのかを考察する。

境界地域、すなわち文化的、政治的境界地域の研究は、二〇世紀末以降の急速なグローバル化に伴い、近年人類学においても重要性が高まっている。人間の移動に伴う文化や思想の移動により、文化の境界の曖昧さが浮き彫りになると同時に、文化の融合や新たな文化の生成という現象がおきている。このような現象を従来の文化人類学における文化や社会の境界の明確な閉ざされた体系として捉えることは困難になり（太田二〇〇一：三八―三九、床呂二〇〇二：三二）、境界を明確にした枠組みが問い直されるようになった。それに対し、新たな枠組みの代替案として、「ディアスポラ」や「トランスナショナリズム」とも注目されてきたのが、「ボーダー文化」の研究である（太田二〇〇一：三八―三九）。境界地域では文化と文化が接触しあい、体系同士の融合が起きている。そこでは、「既存の文化が体系をなさず、さまざまな異種混雑が行われている」（太田二〇〇一：三八）。江淵一公は、「……複数の集団や範疇、もしくはそれらの境界領域に所属する人々の帰属意識はどのようなものなのか、これらの人々のアイデンティティの二重性・多重性の可能性を理解する視点がグローバル化時代の文化研究においては不可欠となってきた」（江淵二〇〇〇：三一八・三一九）と述べている。江淵も指摘するように、境界地域の研究では、しばしば人々のアイデンティティが問題になっている。例えば、グロリア・アンザルデューアは（Gloria Anzaldua）は *Borderlands / La Frontera*（一九八七）で、アメリカとメキシコの国境地域に住む人々の心理的境界を往来するアイデンティティを描き出している（2）。

これまでのボーダー文化研究は、国境という境界、特にアメリカとメキシコの国境地域の事例が多く⁽³⁾、それ以外の境界地域の研究に関しては蓄積が十分とはいえない。特に、沖永良部島のような国境以外の「重層的な境界」によって特徴づけられる境界地域の研究報告は少ない。よって本研究は、「ボーダー文化研究」という文脈において、沖永良部島の境界性の特徴を反映するアイデンティティの一事例として貢献できると考えている。

また、これまで文化人類学におけるアイデンティティは、主にエスニシティの原動力としてのエスニック・アイデンティティがエスニシティ論と重なりながら言及されてきた。そのなかで、エスニック・アイデンティティは、主に原初論対状況論・用具論（後述）という形で論じられてきた^{〔金二〇〇〇・七八〕}。そこでは、ある特定のエスニックグループのエスニック・アイデンティティが「統一体」として描かれてきたといえる。しかしながら、沖永良部島の人々は、マジョリティにもマイノリティにもオーセンティックな意味ではなれない「境界人」であり、国民国家対マイノリティという構図におさまることができない。よって、そのような人々のアイデンティティを、国民国家という枠組みに基づくエスニシティ論で説明するには限界がある。沖永良部島は、「日本／沖縄」、「鹿児島／沖縄」、「奄美／沖縄」など重層的な境界にあり、人々は重層的かつ融合的なアイデンティティをもっている。本稿では、これらの境界のうち「鹿児島／沖縄」の境界性のもつ特徴に注目し、そこに住む人々の重層的かつ融合的なアイデンティティの考察を試みる。

また本稿は、これまで「伝統」文化、「伝統」社会中心であった奄美・沖縄研究に、「ボーダー」という新たなアプローチを提示する試みでもある。「沖縄学の父」といわれる伊波普猷以降の奄美・沖縄研究は、奄美・沖縄の文化が日本文化の「古層」として価値が付与されたため、「伝統」的な文化が中心的に「語られ」てきた。松井健の『琉球のニューエスノグラフィー』(一九八九)、原知章の『民俗文化の現在』(二〇〇〇)、そして一九九〇年代の太田好信による沖縄研究「太田一九九八、二〇〇一」などに代表される新たな視点も導入されは始めている。だが、これらの新たな視点をもった先行研究も奄美に対する視野が十分とはいえず、また境界性に関する実証的な研究は報告されていない。よって本稿は、ポストコロニアルの時代における「ネイティブ」による奄美、沖縄永良部島民のアイデンティティ研究として萌芽性を持っていると考えている。

本稿は、参与観察、文献資料調査、インタビュー調査、質問紙調査の成果に基づいている。文献資料調査は、古文書、書簡、記録書、町役場発行の広報、ローカル新聞、センサスなどを含む。インタビュー調査は、質問項目を用意し会話を録音するフォーマルなインタビューおよび日常における談話などインフォーマルな会話を意味している。また本稿では、量的・統計的データを補うために質問紙調査を導入した。質問紙調査は、沖縄永良部郷土研究会、和泊町^{わどまり}、知名町^{ちな}両役場などの協力を得、二〇〇一年八月から二〇〇二年一月までの半年間に、無記名式で行い、対象者は、沖縄永良部島に住民票を持つ「エラブンチュ(沖縄永良部の人)」とした。サンプリングの方法は無作為抽出法ではなくク

オータ法(4)で行い、性別、町別、年齢別を主な基本属性とし、母集団の構成比率に合わせサンプルの抽出を試みた(資料1参照)。サンプル数は六〇〇で母集団約一四、五〇〇人(5)の約四%である。人々のアイデンティティに関わる語りは、語る相手によって変わりうるので、筆者は相手に沖永良部出身者であることを明示した。つまり、筆者が得たインタビュー調査および質問紙調査から得たデータは、沖永良部出身者である筆者に対して語った、あるいは答えたデータである。

以下では、まず用語の定義をし、沖永良部島民の権力者層の変遷を、沖永良部島が外的勢力に影響を受け始めた三山時代に溯り通時的に明らかにする。そして、これら外的勢力が沖永良部島の人々のアイデンティティに与えた影響を質問紙調査資料やインタビューデータをまじえ考察する。

II 用語の定義

まず、本稿で使用するアイデンティティという語の定義をし、沖永良部島の人々のアイデンティティについて概観する。アイデンティティ(identity)という語は、アメリカの精神分析学者エリクソン(Erik Homburger Erikson [1902-1994])によって提唱された概念である(6)。彼が、人格発達理論において青年期の心理的社会的危機を示すために用いた言葉であった。アイデンティティという言葉は、エリクソンの著である*Childhood and Society* [1950]、*Young Man Luther* [1958]で使われ始め、さらに*Identity and Life Cycle* [1959]、*Identity: Youth and Crisis* [1968]などで中

資料 1

質問紙調査対象者データ

サンプル数=600

性別

男	310	(51.7%)
女	290	(48.3%)

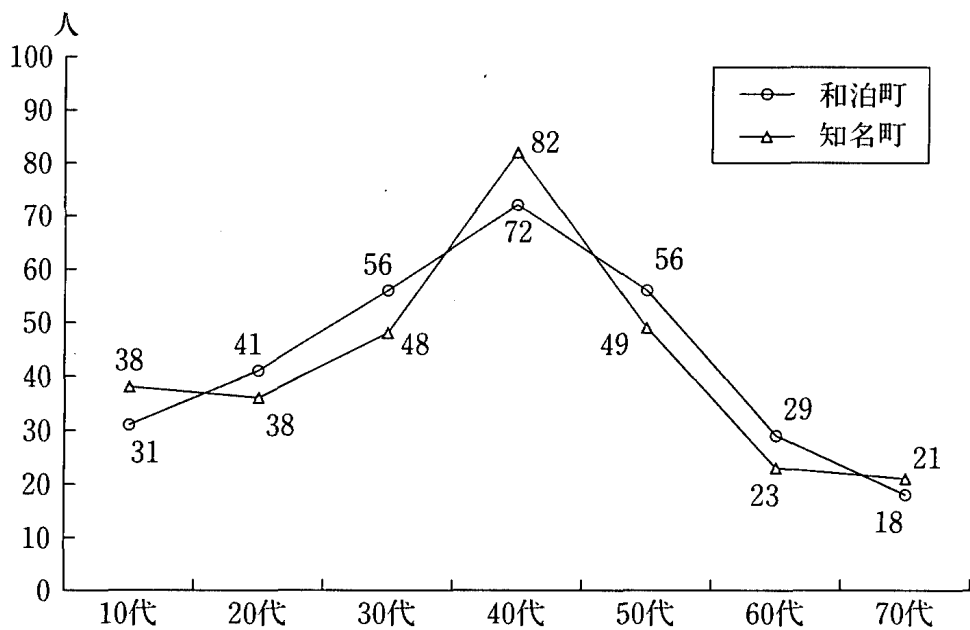
年齢

	和泊町	知名町	計	
10代	31	38	69	(11.5%)
20代	41	36	77	(12.8%)
30代	56	48	104	(17.3%)
40代	72	82	154	(25.7%)
50代	56	49	105	(17.5%)
60代	29	23	52	(8.7%)
70代	18	21	39	(6.5%)
計	303	297	600	(100.0%)

町別

和泊町	303	(50.5%)
知名町	297	(49.5%)

町別、年代別データ分布



心的に論じられ、社会科学諸分野において広く使用されるようになった。

アイデンティティは、人間が乳幼児期から老人期までの身体的、生理的発達の各段階で自分が自分である証明をするために獲得する自覚である。したがって重層的かつ多面的意識である。人間の自己概念には、自分史的な記憶や自分独自の性格や考え方などの「個人的アイデンティティ」が存在するのに対し、ある集団のメンバーとしての自己定義も存在する〔村田二〇〇〇：二〇八・二〇九〕。後者は一般的に「社会的アイデンティティ」と呼ばれる。社会的アイデンティティは例えば、〇〇国民、〇〇県、〇〇村、〇〇大学などとカテゴリー化された集団の一員としてのアイデンティティである。本稿では、このような集団の一員としての社会的アイデンティティに焦点をあて便宜的に単にアイデンティティと記す。

すでに述べたように、文化人類学で論じられてきたアイデンティティは、エスニシティ論と重なりつつ、エスニックグループのエスニック・アイデンティティが原初論対状況論、用具論として主に論じられてきた。エスニシティにおける原初論とは、「血縁や親近感に基づく原初的紐帯とも呼ぶべき非合理的な感情によって人間集団は分割されており、その分割は人間にとって根源的であるとするもので、アイザックス (Isacs 1975) に代表される」〔金二〇〇〇：七九〕。また状況論と用具論は理論的に重なっており、「エスニック・アイデンティティが政治的利益のために人々の力を動員する際の合理的で有効な手段であったり、それが戦略的に維持されたり強化されたりする」というもので、A.

ローエン (Cohen, A. 1974) に代表されるとされる」[金二〇〇〇:七八・七九]。またバース (Frederik Barth) のエスニック・アイデンティティにポイントをおいたエスニック・バウンダリー論も状況論、用具論とみなすことができる。バースの主張は、エスニシティの核は自他を区別する自集団に対する帰属意識 (ascription)・同一視 (identification) にあり、エスニック・グループの特徴である祖先を共有する集団の文化的属性は変化してもこの帰属意識が継続する限り自他を区別する境界は保持され、そのようなエスニック・アイデンティティは他の集団との相互作用を営む「状況」によってその輪郭が明確になるというものである[江渕二〇〇〇:二七七・二七八]。

これらのエスニシティ論で語られるエスニック・アイデンティティは、いずれもエスニシティの核として「統一体」として描かれることが多かった。このような従来のアイデンティティの概念を批判し再検討を促しているのはスチュアート・ホールに代表されるカルチュラルスタディーズの領域である。ホールは、「アイデンティティという概念は、変化せずに変転をする歴史のすべてを通じて最初から終りまで展開されていくような、自我の安定した核を示すものではない」[ホール二〇〇一:一一・一二]と批判する。ホールは、アイデンティティが決して統一されたものでもなく、また単数でもなく、「たえず根元的な歴史化に従うものであり、変化・変形のプロセスのなかにある」[ホール二〇〇一:一二]という。さらには、アイデンティティは「……すべての歴史的に特別な展開と実践の内側に位置付けなければならぬし、また特にグローバリゼーションと関連させて位置付ける必要が

ある」「ホール二〇〇一・一二」と述べる。このような視点は、境界地域の人々のアイデンティティを捉えるのに有効な視点であると考えられる。文化人類学においては、このようなアイデンティティを綿密なフィールドワークに基づき人々の文化的実践の中から捉えることが重要であると筆者は考える。筆者はここで、これらの新たな視点を加味し、「アイデンティティ」を次のように定義する。「深層部において、アイデンティティは、意識せざるを得ない状況によって呼び起こされるもので、そのような必要性がなければ意識の底にある感情的な愛着であり帰属意識である。そして、表象部において表出するアイデンティティは、人々がおかれた政治的社会的環境に大きく左右され、他者との絶え間ない相互行為的状况下において選択されうるといふ、複数性および可変性をもつ。さらに、このような表出されるアイデンティティは、文化的に世代を超えて伝達され、歴史的に構築されうる」と定義する。

我妻洋によると、「集団アイデンティティは集団の成員に共通する身体的特徴、集団の起源と歴史、国籍、言語、宗教、価値観、地理的環境などの過去の総体と、他の集団との力関係や富、政治的経済的社会的な現在の条件などの要素により構成され、集団によりその中の特定の要素がとくに重要視される」「我妻一九九四・三」といふ。本稿ではこの観点をふまえ、沖永良部島に住む人々を、集団の起源と歴史、言葉、信仰、地理的環境など歴史的文化的政治的な要素を基本的に共有する一つの集団とみなす。ただし、その集団のメンバーシップには流動性があるとする。そして、本稿においては、

一つの社会集団である沖永良部島に住む人々が一つの集団としていうところの「オキナワ」を「沖縄」と記す。しかし、その「オキナワ・沖縄」が意味するのは、沖縄島を中心とするが、その範囲に明確な境界はない。それは、近隣の政治的勢力で歴史的に沖永良部島と関係があつた、三山時代の北山（山北）、琉球処分までの琉球王国、琉球処分後の沖縄県であり、歴史的文化的社会的総体として曖昧さをもった概念としての集団である。そしてまた、「鹿児島」も沖永良部島の人々の言うところの「カゴシマ」で、歴史的文化的社会的総体としての曖昧さを残す概念的な集団であり、それは一六〇九年の琉球侵攻後、沖永良部島を直轄領とした薩摩藩であり、また現在属している鹿児島県である。

III 政治の歴史と権力構造

一 権力者層の変遷

既に述べたように、政治の歴史のなかで島外からの政治勢力、特に沖永良部島の南方に位置する沖縄と、北方に位置する鹿児島からの政治勢力は島の人々のアイデンティティにさまざまな影響を及ぼしている。それらの中で、権力者層の出自に基づくアイデンティティに焦点を当てる。沖縄系出自を名乗る人々の始祖とされる人物は三山時代（一四世紀頃）に溯る。「宗」^{そう}、「要」^{かなめ}姓を名乗る親族集団は、以下で説明する「永良部世の主」^{えらぶよぬし}の子孫を名乗り、アイデンティティの拠りどころとしている。

一方、鹿児島系出自をアイデンティティの拠りどころとしているのは、薩摩藩直轄領時代に赴任してきた藩役人を始祖としている場合が多い。

三山時代から琉球王国時代は世の主の子孫が領主となりその後権力は世襲して受け継がれ沖縄系の人々を中心に権力をもった。しかし、薩摩藩の琉球侵攻後、薩摩藩直轄領となった沖永良部島では次第に薩摩系子孫の権力が増していき、現在もその影響が残っている。

二 三山時代（一四世紀頃）～琉球王国時代（一五、一六世紀）

二―一 三山時代

沖永良部島が島外から政治的影響を受け始めたのは一四世紀以降であった。それまでは集落に有力者がおり集落をまとめていたと考えられ、現在でもこれらの豪族に関する伝説は数多く伝承されている。沖縄が三山時代であった一四世紀頃、沖永良部島は北山（山北）王の勢力下にあった。沖永良部島は、北山王の次男とされる真松千代^{ましかちよ}が領主「世の主」^{よぬし}として島を治めた。「永良部世の主」は島の祭職である祝女の姪オキヌルと北山王の間に生まれたとされる。以後、島の統治者としての地位を世襲し、琉球王国時代を経て薩摩藩直轄領時代中期頃まで世の主の子孫を中心とした沖縄系出自の人々が権力者層を形成した。

永良部世の主に関する文献史資料は、薩摩藩直轄領時代であった一七〇六年に薩摩藩による琉球関

係の文書や家系図の取り上げ命令(7)によりその多くが焼却処分となったとされ(和泊町編一九八五・三八二)、一七世紀以前のものは少ない。よって、これらの根拠とされる文献史料としては、一七一年に薩摩藩の命により沖永良部島の与人(島役人の最高職)三人と与論島の与人二人の連署で藩に提出した「世の主の由来記」と一八五〇年に世の主の子孫と言ひ伝えられている宗一族の平安統(当時の身分は与人格横目)という人物によって書かれた「世乃主かなし由緒書」がある。また沖縄の万葉集といわれる琉歌集『おもろそうし』(8)には沖永良部島の歌一三首中、世の主に関する歌謡が四首ある。

『おもろそうし』の中の永良部世の主を詠んだ歌(訳は外間守善校注『おもろそうし』参照(9))

一 永良部世の主の 選でおちやる 能作 赤で百読の真絹 取てみおやせ

又 離れ世の主の 選でおちやる (第一三一―一六)

(永良部世の主、離れ世の主が選んでおいた芸事をやる人、赤頭部の若者たちよ、美しい絹を取って、世の主に奉れ)

一 永良部世の主の 御船 橋 しよわちへ 永良部島 なちやる

又 離れ世の主の (第一三・一九〇)

(永良部世の主が、離れ島の世の主が、お船を架け橋に給いて交易をし、永良部島を立派な島に

成したことの見事さよ)

一 永良部世の主の 選でおちやる 土触れ 土触れや 世の主ぢよ 待つよる

又 離れ世の主の 金鞍 掛けて 与和泊 降れて(第一三・一九一)

(永良部世の主が、離れ島の世の主が選んでおいた馬の群れの見事な事よ。馬の群れは、世の主をこそ待っているのだ。世の主は馬に美しい金鞍を掛けて、与和泊にお降りになったのだ)

一 永良部立つ あす達 大ぐすく げらへて げらへ やり 思ひ 子のため

又 離れ 立つ あす達 大ぐすく(第一三・一一四)

(永良部島に出発する長老たちよ、大きな城を造ってあげなさい、愛する王子のために)

当時、永良部世の主の居城は、沖縄からの連絡船の往来がよく見える内城集落内の小高い丘の上にあり、内城集落は政治の中心地であった。永良部世の主は中山王の三山統一によって自害したとされ(「世乃主かなし由緒記」(一八五〇)、「世の主由来与人西平調書」(一七四四年頃(10)、その年代は一四一六年頃であるとされる。世の主の墓は内城にあり史跡文化財として鹿児島県より指定されている。また世の主を祭る神社は生まれた場所(下城集落)と居城跡(内城集落)の二個所に、また世の主の母オキヌルを祭る神社が上城集落にある。永良部世の主に関する伝説は数多く、沖永良部島の人々に親しみをもって受け止められている。そして、沖永良部島と沖縄の関係の親密さを表すときに

は必ずといってよいほど言及される人物である。

二―二 琉球王国時代

三山時代が終結し中山王によって統一され琉球王国が形成されると、北山王の支配下であった沖永良部島も琉球王国に組み入れられた。琉球王府より任命される地方官人としての最高職「大屋子」は、世の主の子孫が継承したと思われる。永良部世の主の子孫は居を直城ノシグスクにかまえ首里王府が任命する地方領主の官職「大屋子」を担っていたので「直城大屋」と呼ばれていた。『世乃主かなし由緒書』〔二八五〇〕には、

… 一 右直城の子孫の上中山王御取立にて代々大屋役仰付相勤来り候由。

依之当分私迄も島中のもの大屋子孫と唱申候。尤大屋役何代相勤申候哉不詳候。…

とあり、琉球王国時代には永良部世の主の子孫直城大屋ノシグスクは、中山王のとりたてにより島の最高の官職である大屋子を代々務めた旨が記されている。これらのことは、薩摩藩直轄領となった時代に書き残された要家かなめ（永良部世の主子孫）所蔵文書（後出）によって裏付けすることができる。

また、永良部世の主の子孫が統治者の地位を世襲したことは、徳之島に存在する文書によっても明

らかにされている。永良部世の主の子孫で、琉球王国時代末期（中世末）の沖永良部島の大屋子は徳之島の大屋子が死去したため、徳之島大屋子の職を兼任した時期もあった（坂井一九三三：二二五）。この件に関しては、「八十八呉良謝佐栄久由緒記」（11）「徳之島世の主由緒書（賓満家系図）」（12）、佐家大殿地蔵「雜書由緒記写」（13）に記述がある。これらによると、徳之島大親（14）東ヶ之主という人物が、万暦三十六年（慶長十三年）二月死去し、後役が任命されるまでの間、徳之島大親の職務を執行するため、沖永良部島大親首里之主が派遣されたという。慶長一三年は一六〇八年で薩摩藩による琉球侵攻（一六〇九）の前年に当たる。このように、三山時代以後琉球王国時代も世の主の子孫の親族集団に権力が集中したことがうかがえる。

三 藩直轄領時代（近世）

三―一 前期沖繩系出自の大屋子時代

一六〇九年の薩摩藩の琉球侵攻により、沖永良部島は他の奄美諸島とともに一六一一年に琉球王国から割譲され薩摩藩直轄領となり、この政治的状況は明治まで続いた。権力者層は琉球王国時代に引き続き永良部世の主の子孫を中心とした縁者が占めた。最高の地方官職である「大屋子」は、沖繩出自の人々が統治者の地位を世襲していた。しかし、次第に鹿児島系の人々によってその地位は取って代わられることになった。

権力構造をみる指標として歴代の与人の出自や出身集落を注意をむけると、藩政時代（近世）中期頃までは、内城集落中心に居住していたソーバラと呼ばれた親族集団（世の主の子孫・宗家）や琉球王国の第二尚氏時代の王家の流れを汲む一族でハナグスクバラと呼ばれた親族集団（豊山家、金城家）など沖縄系出自集団から多くの与人を輩出していた（資料2・歴代与人一覧表参照）。しかし、次第に薩摩藩役人の子孫である鹿児島系の人々の多くが与人を努めるようになり権力が移行し、文化一（一八一四）年に内城集落の宗家の祖先「平安統」が与人に就任したのを最後に、以後沖縄系出自から与人に就任することはなかった。内城集落と和泊集落出身者の与人の人数を比較すると、代官所が設置された一六九〇年から一〇〇年後の一七九〇年までは、内城出身者は七人で和泊出身者は九人、その後明治期までは内城出身者は二人、和泊出身者は一人で、沖縄系の人々の勢力の弱まりを示唆している。

沖縄の権力者と親族関係にある永良部世の主、および豊山、金城家の子孫は薩摩藩直轄領時代の前半には、島で最高の官職を世襲した「永吉一九八五・一七一、先田一九九七・八」。薩摩藩直轄領になったのち、大屋子の役が琉球王国との関係が強いとして廃止になったが、その後も大屋子に代わる最高の官職「与人」に任命されたことが、要家に伝わる文書すなわち、一六一三年の知行目録と一六九七年の家譜より見出すことができる。

要家に所蔵される文書一（一六一三「慶長一八」年）、文書二（一六九七「元禄一〇」年）には系

資料 2

「歴代与人一覧表」

年代	与人名	出身集落	子孫の姓	備考
元禄元年 (1688)	中城	内城	宗	大城間切与人
元禄八年 (1695)	池久保	内城	宗	喜美留与人、中城の子
元禄十二年 (1711)	先久間			喜美留与人
正徳元年 (1711)	平安山	手々知名	大坪	
正徳元年 (1711)	具永久	和泊	陽	
正徳元年 (1711)	久米村	和	前	
享保元年 (1716)	平安山	手々知名	大坪	
享保元年 (1716)	久米村	和	前	
享保元年 (1716)	豊峯	内城	豊山	
享保三年 (1718)	具永久	和泊	陽	
享保三年 (1718)	具志川	和泊	有川	
享保四年 (1719)	平安山	手々知名	大坪	琉球尚敬王即位祝いのため渡琉。
享保九年 (1724)	平安山	手々知名	大坪	朝鮮船漂着
享保九年 (1724)	久米村	和	前	喜美留与人
享保九年 (1724)	富久安	手々知名	大脇	
享保十五年 (1730)	喜美座	手々知名	龍	
享保十五年 (1730)	宜嘉統	皆川	西村	
享保十九年 (1734)	平安統	内城	宗	
享保十九年 (1734)	富玖治	手々知名	大脇	
延享元年 (1744)	仁志平	和泊	和気	
延享元年 (1744)	池悦	内城	宗	
延享二年 (1745)	富久安	手々知名	大脇	
寛延三年 (1750)	池悦	和泊	有川	
宝暦元年 (1751)	具志川	内城	宗	
宝暦四年 (1754)	平安統	内城	宗	
明和六年 (1769)	富玖治	手々知名	大脇	
明和八年 (1771)	富玖治	手々知名	大脇	
安永三年 (1774)	玉江原	和泊		
安永四年 (1775)	久志堅	和泊	伊集院	御祝儀に付き与人上国
天明元年 (1781)	直川	和泊		
天明六年 (1786)	宜志甫	大城	周熊	

天明七年 (1787)	董南美	和泊	有川	
寛政三年 (1791)	平安統	内城	宗	
寛政四年 (1792)	真玉橋	手々知名	龍野	
寛政五年 (1793)	玉川	和泊	陽兼	
寛政九年 (1797)	西正	和泊	西彦熊	
寛政十二年 (1800)	真玉橋	手々知名	龍	尚温王即位為与人宰領
享和二年 (1774)	宮川	和泊	栄宮信	
文化四年 (1807)	西正	和泊	平安雄	尚瀬王即位為与人宰領
文化十一年 (1814)	夏鼎用	手々知名	竹	
文化十一年 (1814)	平安統	内城	宗	
文化十四年 (1817)	久志堅	和泊	伊集院	
文化十四年 (1817)	清澄	喜美留	福山清寛	
文政五年 (1822)	杜美榮	和泊	市来	
文政八年 (1825)	嘉美座	手々知名	龍為久	
天保九年 (1838)	饒覇			
天保九年 (1838)	杜敬	和泊	市来	尚育王即位為与人宰領
天保十年 (1839)	右左美	手々知名	町田	
天保年間 (1843)				夏鼎幹(竹氏の祖)、曾勲(沖氏の祖) 唐本通事に任ぜられる。
弘化四年 (1847)	右左美	手々知名	町田	
弘化	右左則	手々知名	町田	右左美を世襲
安政元年 (1854)	伊名川	喜美留	伊地知	
安政二年 (1855)	坦晋	和泊	操坦勁	
安政三年 (1856)	蘇延良	手々知名	沖利基	
文久元年 (1861)	山真粹	和泊	山口	
文久二年 (1862)	義盛	和泊	西	
元治元年 (1864)	正照	和泊	土持	
慶応元年 (1865)	蘇延良	手々知名	沖	

(『和泊町誌－歴史編－』を参考に作成)

図と以下の記述がある。

文書一

高拾石

右知行之御事於其地別而依被召仕充行畢 田坪字有 別紙
抽御奉公者可御恩賞之旨 所被仰出也 仍目錄如件

伊勢兵部少輔貞昌 印

三原諸右衛門尉重利 印

慶長十八年九月廿五日 永良部之嶋 よひと

文書二

高拾石之目錄 伊勢兵部様三原諸右工門様御判有 右拝領之先祖直シ城之大屋わらべ名
次郎かね 女房大あむしられわらべ名 あめミつかね……

元禄拾年丁丑五月廿五日 わらべ名 生城部

三―二 権力者層の移行…藩役人との通婚

薩摩藩直轄領時代の中期頃には、沖永良部島は徳之島に設置された代官所の管轄下であったが、一

六九〇年に沖永良部島に代官所が設置され、薩摩藩から派遣された役人が直接島に滞在し統治するようになった。藩役人の滞在が契機となり、島の権力構造にも変化がおこった。これまで、永良部世の主の親類縁者によって権力が集中していたが、各集落の有力者たちが藩役人との通婚による縁戚関係によって社会的地位の流動性が可能になり、次第に権力は鹿児島系の人々に移っていった。

鹿児島系の人々が権力を持つに至った背景には、薩摩藩役人と沖永良部島の女性との通婚による社会関係があった。藩役人との通婚が社会的地位向上のための手段として用いられたのである。薩摩藩からの役人の就退任や主な出来事を記録した「沖永良部島代官記系図」によると、赴任した役人の主な役職と人数は、代官一人、横目一人、附役三人であった。「沖永良部島代官系図」には、一六九〇（元禄三）年から一八七三（明治六）年までの一八四年間に九三名の代官を含む五四四人の派遣藩役人の名が記されている。中には数回にわたって任命された藩役人もいた。例えば、大久保次郎右衛門（大久保利通の父）は一八二七（文政一〇）年と一八三七（天保八）年の二度にわたって附役として赴任している。

薩摩藩より派遣された藩役人の役所（詰所）と官舎（仮屋）は薩摩からの船の受け入れ口となった島の東部の港に隣接する場所（現在の和泊集落）に設置された。在任期間は、二年から四年で、ほとんどが単身であった。その間身の回りの世話をする女性が現地妻として官舎に住み、役人とともに丁重に扱われた。藩役人は島の最高権力者としてトンガナシ（お殿様）、現地妻は島の言葉でアング

シヤリ（姐御様）という尊称で呼ばれた。藩役人と現地妻の子供はトンガナシグワ（お殿様の子）、特に男児はボウ、女児はアカと呼ばれ、現地妻およびその子は優遇された。例えば農民に課された夫役（15）（女子一三歳から五〇歳まで、男子一五歳以上六〇歳まで労力の貢をする制度）が免れた（永吉一九八五・三八〇―一三八一）。また、現地妻は藩役人の世話役として島民からの税で生活し、田畑を買い与えられたため、役人が薩摩へ帰った後も一生の生活を支えることができたと言われる（甲一九八七・二三）。またその子供たちは、武士の子供として優遇され、成長して島役人に取りたてられる場合が多かった。このように、アングシヤリになると特権が多いため、「ナナウティグチヌミジクダイアングシヤリニゲーシユン」（七個所の湧き水の落ち口から浄水を汲んで神に捧げ、アングシヤリに取りたてられるように祈願する）という諺もある。

アングシヤリはどのようにして選出されたのかに関する史資料は乏しいが、大福謙蔵氏（七〇歳、昭和七年生）からの聞き取りで興味深い口頭伝承が得られた。大福家は鹿児島系出自と代々言い伝えられており、先祖に藩役人として赴任してきた本田氏のアングシヤリになった人物がいたということを誇りとして母親より聞いた話であるという。沖永良部島に、新たに役人が赴任すると各集落の有力者が娘を連れてアングシヤリを希望し藩役人のもとに集まった。藩役人は、その中から一人指名し酒を注がせ、それがその女性をアングシヤリとして指名した合図とされ、他の人々は去っていくのだという。先祖でそのような容貌に優れた女性がいたということを誇りにした話として、大福は母より何

度も繰り返し聞いたという。

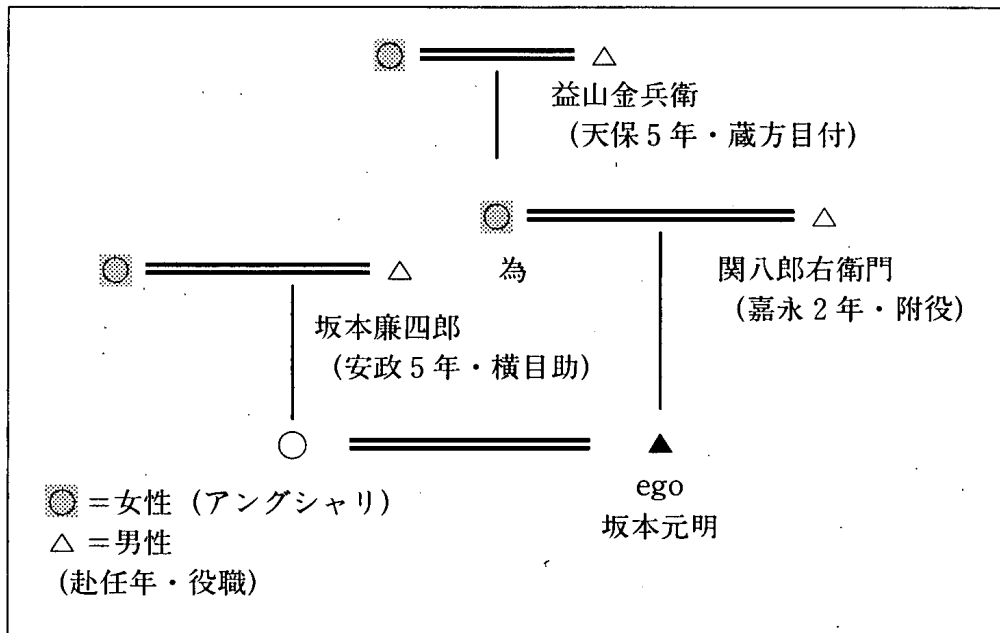
藩役人の子供（トンガナシグワ）は、同じ薩摩系の血縁同士で姻戚関係を結ぶ事も多かった。藩役人の子が娘であつたら成人したのち、その後赴任した藩役人の妻になることが多かった。例えば、明治三〇年から三五年の間の戸長（町長、村長の前身）であつた坂本元明を中心にその関係を図で表すと、図2のようになる。

図2に示したように、坂本元明は嘉永五年に附役として島に赴任した関八郎右衛門とアングシャリ「為」の子である。坂本の母「為」は、天保五年に蔵方目付として赴任した益山金兵衛とアングシャリの娘である。また坂本は安政五年に横目助として赴任した坂本廉太郎とアングシャリの娘と婚姻関係を結んでいる。

藩役人とアングシャリとの間に生まれた子には薩摩で教育を受け、後に島の指導者になった人物もいた。例えば、土持正照は、天保二、六、九年の三度にわたり沖永良部に藩役人として赴任した土持叶之穰と現地妻「鶴」の子であるが、鹿児島の子に嫁した土持家に引き取られ薩摩の郷中教育を受けた。しかしその後正妻に嫡子が生まれ土持正照は沖永良部にもどった。土持はその後、明治六年に初代戸長となった。

藩役人の子孫は代官所のあつた和泊集落を中心に住み定住するようになったので、和泊集落とその隣接集落の手々知名集落には、鹿児島系の人々が多く住むようになった。そして、藩役人である武士

図2. 坂本元明を中心とした婚姻関係図



の子孫として優遇され、経済的にも恵まれ、島役人にも取りたてられていくようになり、社会的地位の高い階層を形成するようになった。これらの人々は島の言葉でシユータと呼ばれ、鹿児島系出自の人々を中心とする社会集団を形成した。「シユータ」は、当時一般の人々が上層の人々に対する尊称で、「タ」は複数を表す。これらの人々は、島役人になることが多いことから、官公職に就いている人も指す言葉に転化した。現在でも和泊、知名役場に勤めている人をさしてシユータという言葉が用いられることもある。

島の住民で特に藩役人を補佐しその活躍が目覚しい親族には地方武士に準ずる地位「郷士格」が与えられた。近世後期には五親族が郷士格を与えられたが、その親族はほとんどが薩摩

藩役人と現地妻の子孫であった。これらの人々は、薩摩の武士と区別をするため二字姓は認められず、琉球式に一字姓を名乗ることのみが許された。よって、郷士格を与えられた親族集団は、先祖となる藩役人の姓から一字をとる場合が多く、町、土、山、市、竜の姓を名乗った。例えば、「土持」であれば「土」というようにである。その後明治になり、姓を名乗ることが義務付けられた後は先祖と同じ姓に改姓している場合が多い。和泊集落、手々知名集落の中にはこのような郷士格の親族を含む「武士の子孫」の集落、シユータジマ（シユータの集落）として、他集落にたいして優越意識をもつ人もいた。他の集落の人々はサトチュ（里人）と呼び、シユータジマに対し、「田舎（在、郷）の百姓」という意味でそのように呼び差異化した。薩摩藩役人の子孫で和泊集落出身であった安藤佳翠は、「ワドマイ、アカタジの沿革とワドマイシユータの消長」（一九五三）で「∴そして（和泊、手々知名は）共通の優越感を持っていた。『自分たちはシユータジマのものである』ことをもって任じ、同時に『他のシマの者はサトチュ（里人）だ』としていた」（安藤一九五三）と記している。ただし、かつての政治の中心地であった内城集落に対しては「グスクシユータ」と呼び敬意を示し、サトチュ（里人）扱いにはしなかったという。また、社会の上層部の発展の一方では、砂糖政策による重税などにより、税を払いきれず裕福な農家などの奉公人（ヤトウイ）となっていく人も増えていった。奉公人同士の間にも生まれた子供はヒダワシと呼ばれ、一生、奉公する家の所有する労働力として使役された。近世の沖永良部島ではこのように社会内部の階層化が進み、その中で和泊集落、手々知名集落

のシユータは沖永良部島社会の上層に位置した。

四 近代から現代へ

明治維新後、沖永良部島は近代国家になった日本に鹿児島県の一部として組み込まれることになる。一六九〇年から設置され一八四年間存在した藩の役所は明治八年に廃止された。島の役人の最高の官職であつた与人は戸長と改正された。全島は三地域に区分されそれぞれの区域の長を戸長としたが、戸長も多くの場合シユータから選出された。藩役人の子孫は近世から夫役を免れ経済的にも恵まれ、知識層となり指導的役割を担つた。島嶼町村制が布かれるまでの全島の行政は和泊集落と手々知名集落のシユータによって運営されていたといえる。

しかし、島嶼町村制が施行された明治四一年以降は次第にシユータ以外の人々が少しづつ島の役人に拔擢されるようになった。行政単位は村単位となり沖永良部島は和泊村、知名村に二分された。知名村の出身者が知名村の村長となつたのは一九一四（大正三）年、四代目村長に就任した新納直定が初めてであつた。

そして、シユータによる権力の集中に対する挑戦もあつた。それは、大正九年皆川集落の皆川恵三、中山福富たちによる分村事件の例で明らかである。この事件は、皆川、古里、大城、玉城の四集落による和泊村からの分村を希望するもので、その理由として、「1、村費の負担が皆川、古里、大城、

玉城の集落は村の平均額に比較して過重である」、「2、和泊の一部有志なる者が専横である」が挙げられている「安藤一九五三」。結果的に分村は認められなかったが、分村を主張した皆川恵三は、その後昭和一〇年に和泊村長に就任した。和泊、手々知名集落のシユータ以外で政治のトップの座に就いた初めての人物であった。

近世にはさまざまな特権があり、上層を占めていたシユータも、島内で次第にその権勢を失っていった。シユータの中には鹿児島に移住する家族も多く、人数が減少していった。また、和泊集落は港に近いたため島外からの移住先にもなり、また商店が集中する生活に便利な集落として他の集落の人が移住し始め、さまざまな人が住む地域となった。そのため「和泊・手々知名集落Ⅱシユータジマ」という意識は次第に薄れていった。また明治以降、地租改正、教育の普及などにより社会層は徐々に平準化され、多くの人が能力に応じ社会的上昇が可能になった。その手段が、本土で高い教育を受けることで教員や医師などになることであった。町長や教育長、文化協会長などの指導的地位は、小・中学校などの教育機関を定年退職した元教育者たちの定年退職後のポストとなるが多かった。しかしながら、シユータの権力がなくなったというわけではなく、現在でも経済力を背景に町長選、町会議員の出馬には多大な政治的発言力をもっているシユータの親族集団も存在する。

IV 考察・現在にみるアイデンティティへの影響

一 出自によるアイデンティティ

これまで、歴史における権力層に焦点を当ててその変遷を捉えてきた。政治の歴史が現在の沖永良部島の人々のアイデンティティにどのような影響を与えているのか、質問紙調査資料やインタビューデータをまじえ考察してみる。沖永良部島は、沖繩と鹿児島間に位置し、政治の中心から勢力拡大のための対象となった。その政治の影響の副産物として、沖繩系、鹿児島系の権力者層の子孫が存在している。祖先崇拜に支えられながら、現在でも彼らの先祖の出自は基本的なアイデンティティの拠りどころとなっている。社会的なアイデンティティは、他の要素とも複合的に関係しており、祖先の出自が帰属意識を決定する全ではないが大きな要因の一つである。例えば、永良部世の主の子孫を名乗る宗家では、世の主神社の神官を代々一族の中から選出し、永良部世の主を大切に祀っている。そして、この出自集団にとって、永良部世の主と自分たちを結ぶ家譜や縁の品々は大切に保管され彼らの心の拠りどころとなっている。また、藩役人の子孫で近世末には郷土格を与えられていた町田家には、祖先である藩役人ゆかりの樹齢約三〇〇年の福木があり、アイデンティティ・シンボルとして大切にされている。

筆者が行った質問紙調査にも、出自が沖縄、鹿児島への感情的愛着や親近感の一例として表れている（質問紙調査資料1参照）。例えば、「全国高校野球の試合では、沖縄県代表と鹿児島県代表の野球チームのどちらを応援しますか」という問に、回答者六〇〇人全体の集計結果では、「沖縄県代表」と答えた人が二九・三%、「鹿児島県代表」が三三・六%、「両方」が三八・〇%、「どちらでもない」が〇%であった。出自別のクロス集計をしてみると、沖縄系出自を示した人の五三・八%が「沖縄県代表」と答え、一一・五%が「鹿児島県代表」、「両方」と答えた人が三四・六%であった。一方、鹿児島系出自を示した人の中で、四〇・九%が「鹿児島県代表」、一九・七%が「沖縄県代表」、三九・四%の人が「両方」と答えている。

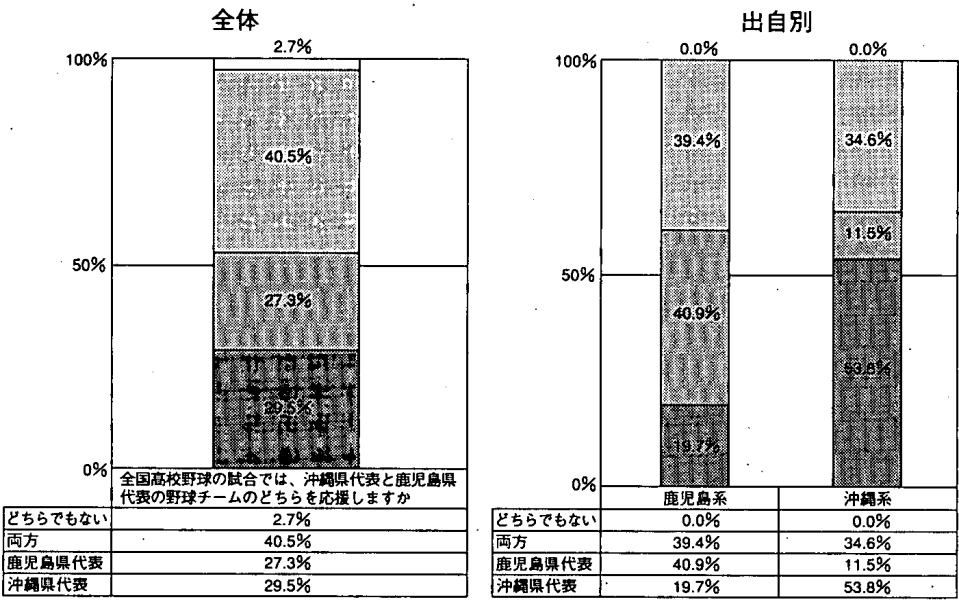
さらに、沖永良部島には、「鹿児島／沖縄」の境界性を反映し祖先が沖縄系と鹿児島系の両方の出自を持つ人も少なくない。このようなケースの人は、どちらにもはっきりとは峻別されない融合的なアイデンティティをもっているが、状況によってはどちらかが顕在化する場合もあるようである。例えば、Aさん（七〇歳・一九三二「昭和七」年生）は自己の出自によるアイデンティティに関連し、以下のように示している。

…鹿児島意識は僕は少ないほう、かな。…ところが家には系図があるんだけど、それにはA家というのは鹿児島、ぼくから七代前だから、今からいうと一〇代前になるわけだけど、それに

質問紙調査資料 1

問 23 全国高校野球の試合では、沖縄県代表と鹿児島県代表の野球チームのどちらを応援しますか？

1 沖縄県代表	176	29.5%
2 鹿児島県代表	163	27.3%
3 両方	242	40.5%
4 どちらでもない	16	2.7%
無回答		



は鹿児島県のA家からきたという風に、兄貴のところにはきれいに書いてあるですよ。薩摩の役人で。だけど、それに対して今度は、僕のおばあさんはメエクマ（16）からきてるわけよ。メエクマの人はどこまでもあれは沖縄で本土とは関係ないと言っているわけよ。どこまでも与人で琉球と言っているわけね。だからぼくの親父のほうからいくと鹿児島と縁があったというし、家のばあさんのところからいくとメエクマだからむしろは沖縄、というし。しかし、そういう風にお袋や親父から物語として聞いているものだからね、どつちかなと思っっているわけ。しかしB家のこともあるしね。そういうわけで、鹿児島、という意識は一般の人より薄いんじゃないかなあと思うんですよね。だからといって沖縄……かといわれるとそれもちよつと抵抗あるし。……琉球サミットのときは僕も一生懸命やってさ、絶対気になるわけよ。今帰仁城、世の主のお父さんのところ、エラブ研究会でいってきて、だから向こうも大変気になるわけね。うーん、どつちかというところ、中間からどつちのほうに、エラブ全体から考えたら、ぼくはどつちを、鹿児島をたくさん向いているのか沖縄をたくさん向いているのか……。うーん、ちよつと、自分ではわかりにくい。……だから、だいたいそういうーであってさ、僕を感じがどうかと言うと、その日によって揺れるからさ。（二〇〇二年九月二日実施のインタビューデータより直接引用）

二 地域的アイデンティティ…集落、町

親族を中心に構成され、所有する農地と結びついている集落は、沖永良部島社会において基本となる社会単位である。例えば、沖永良部の人同士で相手のことを知らない場合は、まず「ウラウダヌヨー」（あなたはどこの人？）と聞かれるが、それは「どこの集落の人か」を問う質問である。

和泊、手々知名集落の人々の集落に基づくアイデンティティは、シュータジマとしてのアイデンティティであり、それは同時に他の集落に対する優越感を含んでいた。そして、明治以降に島が和泊（村・町）、知名（村・町）の二つの行政区に区分されたのちは、和泊町民と知名町民の町民としてのアイデンティティが形成されていった。和泊町は和泊、手々知名のシュータジマを中心地として発展し、シュータたちが政治、行政の中心を占めた。そして、大正初期まで和泊村のみならず知名村の村長も和泊、手々知名のシュータが担い、政治、行政の実権を握っていたこともあり、和泊が知名に対して優越意識をもつようになった。

町制が施行されたのも和泊町が一九四一（昭和一六）年、知名町が一九四六（昭和二一）年と和泊町が知名町より五年早い。また、島外からの玄関口である空港、港、そして鹿児島県からの出先機関である鹿児島県警沖永良部警察署や鹿児島県大島合同庁舎などを和泊町に設置した。和泊町は知名町より社会的に「上位」であり、「進んでいる」という感覚をもつ人が多く存在していることは、人々

の会話からもしばしば読み取れる。

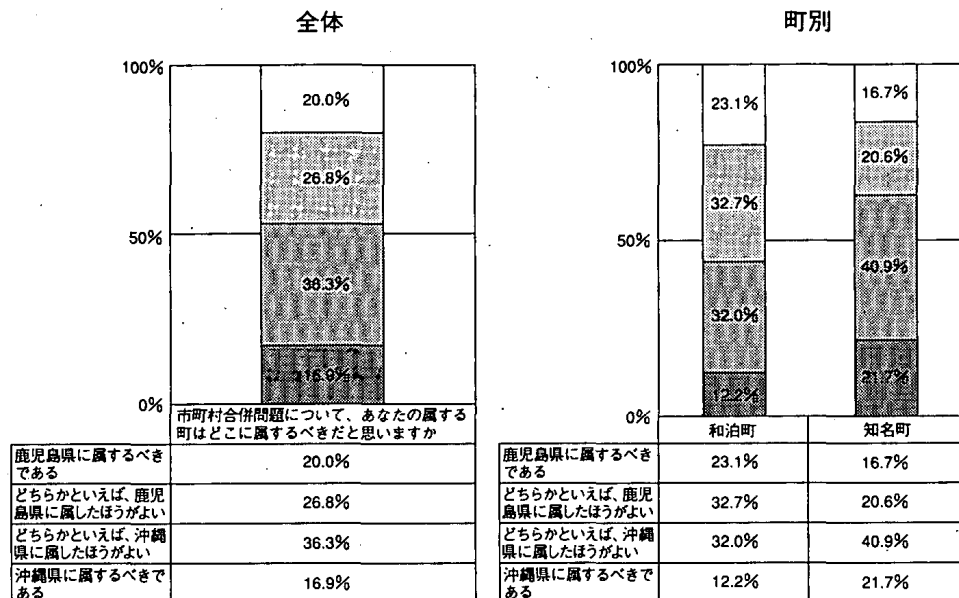
和泊町は、薩摩藩の子孫である鹿児島系の人々が多く住み、一八四四年間、薩摩藩の役所が存在した和泊集落を中心としている。その和泊町には、概して鹿児島に帰属意識を強くもつ人が知名町より多いということがいえる。行政的に沖永良部島が属している鹿児島は、もともと身近な本土として目標とされてきた。そのため、鹿児島に対し政治的に良い感情をもっている。鹿児島系の人々が明治以降も政治の中心に位置し、彼らの志向が政策を通して町民全体に影響を及ぼしたことは容易に想像できる。

明治以降に特徴的になった近代化の度合いを指標にした町民アイデンティティは、和泊町の人が知名町へ、知名町の人が和泊町へと婚姻後の居住は女性が男性の集落へと移動する傾向が強いので(17)、それほど顕著ではないが、それでも筆者が行った質問紙調査結果にも微妙に差異が表れている。概して和泊町には鹿児島に帰属意識をもつ人が、知名町には沖縄に帰属意識をもつ人が多いといえる。筆者が行った質問紙調査の質問項目の一つである「市町村合併問題についてあなたの属する町はどこに属するべきだと思いますか?」という問い(18)に、(1 沖縄県に属するべきである、2 どちらかといえば沖縄県に属したほうがよい)と沖縄よりの帰属意識を示す回答をした人は、和泊町には四四・二%、知名町には六二・六%存在した(質問紙調査資料2参照)。また(3 どちらかといえば鹿児島に属したほうがよい、4 鹿児島に属するべきである)と、鹿児島よりの帰属意識を示す回答を

質問紙調査資料 2

問 24 市町村合併問題について、あなたの属する町（和泊町あるいは知名町）はどこに属するべきだと思いますか？

- 1 沖縄県に属するべきである
- 2 どちらかといえば、沖縄県に属した方がよい
- 3 どちらかといえば、鹿児島県に属した方がよい
- 4 鹿児島県に属するべきである
- 無回答



した人は、和泊町は、五五・八％で、知名町は三七・三％であった。

三 文化的アイデンティティとの関係性

文化的なアイデンティティと出自によるアイデンティティとの関係を考察すると、沖縄系と鹿児島系の出自や町別に関わらず、文化的には沖縄にアイデンティティを持つ傾向がある。出自が鹿児島系であっても文化的には沖縄へ親近感を示す傾向がある。筆者の行った質問紙調査にも、その傾向は、表れている。筆者は、沖縄と鹿児島文化要素（芸能、言葉、食べ物、風習）についてそれぞれ質問した。被調査者のなかで、沖縄系出自と鹿児島系出自を示した人の回答をクロス集計したところ、全体的に、沖縄の文化要素に対する親近感、愛着は鹿児島に比べ、出自の違いを問わず高い（質問紙調査資料3参照）。例えば、沖縄の「歌、踊りなどの芸能」に対する親近感や愛着を（1 非常に感じる、2 どちらかといえば感じる）と答えた人は、沖縄系出自の人は九六・一％で鹿児島系出自の人は九六・九％であった。同様に、鹿児島系の「歌、踊りなどの芸能」に対する親近感や愛着を（1 非常に感じる、2 どちらかといえば感じる）と答えた人は、沖縄系出自の人は三八・四％で鹿児島系出自の人は五二・三％であった。

出自によるアイデンティティは祖先の出自として沖縄あるいは鹿児島に対する帰属意識の重要な部分を占めるが、沖永良部島で生まれ育った人々にとって、文化化の過程で培われた文化的なアイデン

質問紙調査資料 3

表 1

問 16	あなたは次にあげるものに、どれだけ愛着や親近感を感じますか？			
a	沖縄の歌、踊りなどの芸能	実数	(%)	
	1 非常に感じる	326	(55%)	
	2 どちらかといえば感じる	235	(39%)	
	3 どちらかといえば感じない	32	(5%)	
	4 全く感じない	5	(1%)	
	無回答	2	—	
b	沖縄の言葉			
	1 非常に感じる	181	(30%)	
	2 どちらかといえば感じる	321	(54%)	
	3 どちらかといえば感じない	80	(13%)	
	4 全く感じない	16	(3%)	
	無回答	2	—	
c	沖縄の食べ物			
	1 非常に感じる	260	(44%)	
	2 どちらかといえば感じる	280	(47%)	
	3 どちらかといえば感じない	49	(8%)	
	4 全く感じない	8	(1%)	
	無回答	3	—	
d	沖縄の風習			
	1 非常に感じる	188	(31%)	
	2 どちらかといえば感じる	314	(53%)	
	3 どちらかといえば感じない	72	(12%)	
	4 全く感じない	22	(4%)	
	無回答	4	—	

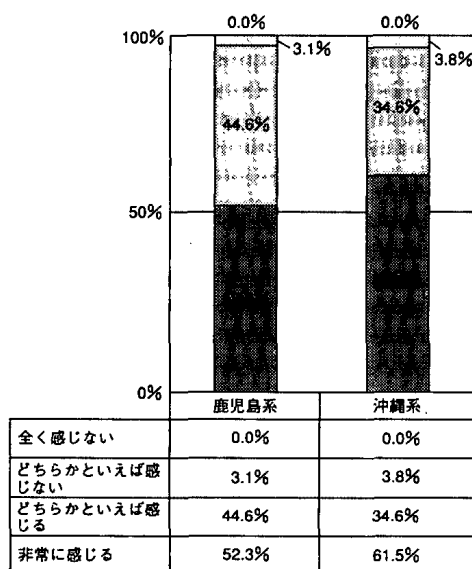
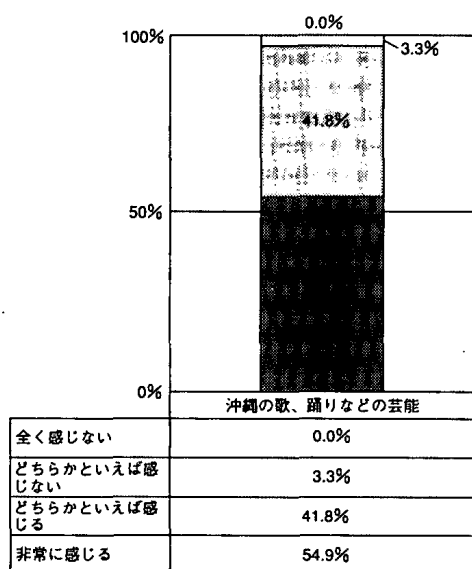
表 2

問 17	あなたは次にあげるものに、どれだけ愛着や親近感を感じますか？			
a	鹿児島島の歌、踊りなどの芸能	実数	(%)	
	1 非常に感じる	28	(5%)	
	2 どちらかといえば感じる	183	(30%)	
	3 どちらかといえば感じない	291	(49%)	
	4 全く感じない	96	(16%)	
	無回答	2	—	
b	鹿児島島の言葉			
	1 非常に感じる	36	(6%)	
	2 どちらかといえば感じる	148	(25%)	
	3 どちらかといえば感じない	253	(43%)	
	4 全く感じない	156	(26%)	
	無回答	7	—	
c	鹿児島島の食べ物			
	1 非常に感じる	37	(6%)	
	2 どちらかといえば感じる	229	(39%)	
	3 どちらかといえば感じない	256	(43%)	
	4 全く感じない	69	(12%)	
	無回答	9	—	
d	鹿児島島の風習			
	1 非常に感じる	17	(3%)	
	2 どちらかといえば感じる	132	(22%)	
	3 どちらかといえば感じない	310	(53%)	
	4 全く感じない	131	(22%)	
	無回答	10	—	

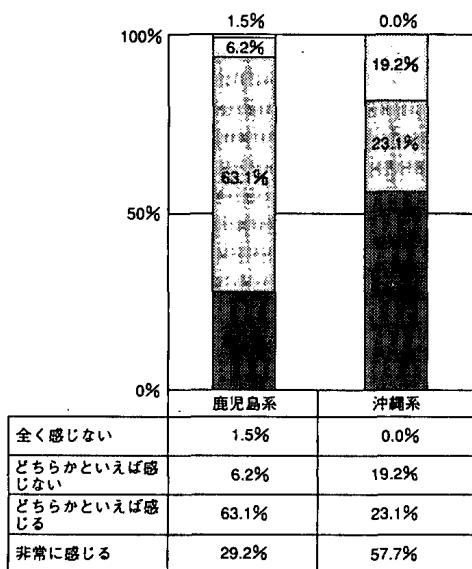
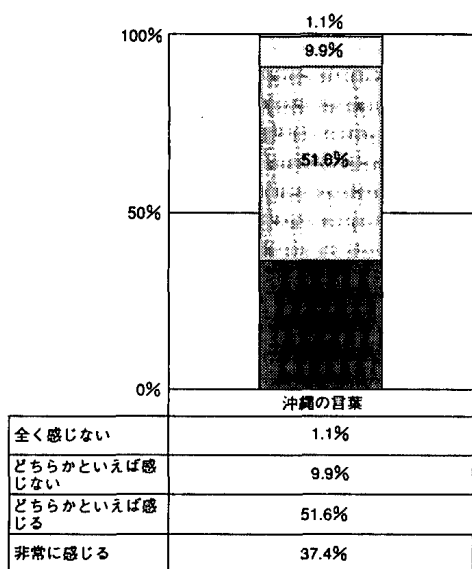
% (小数点以下四捨五入)

問16 あなたは次にあげるものに、どれだけ愛着や親近感を感じますか？

a 沖縄の歌、踊りなどの芸能

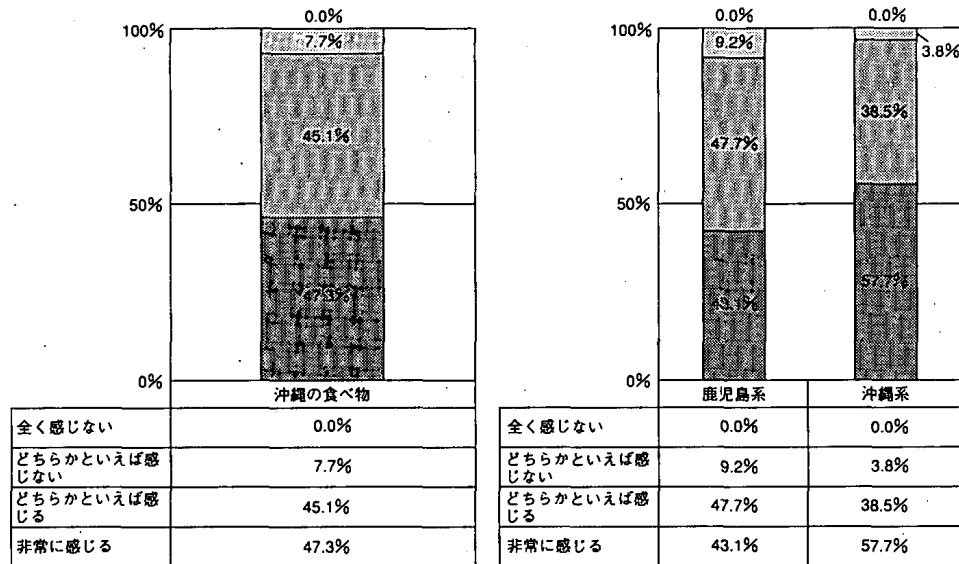


b 沖縄の言葉

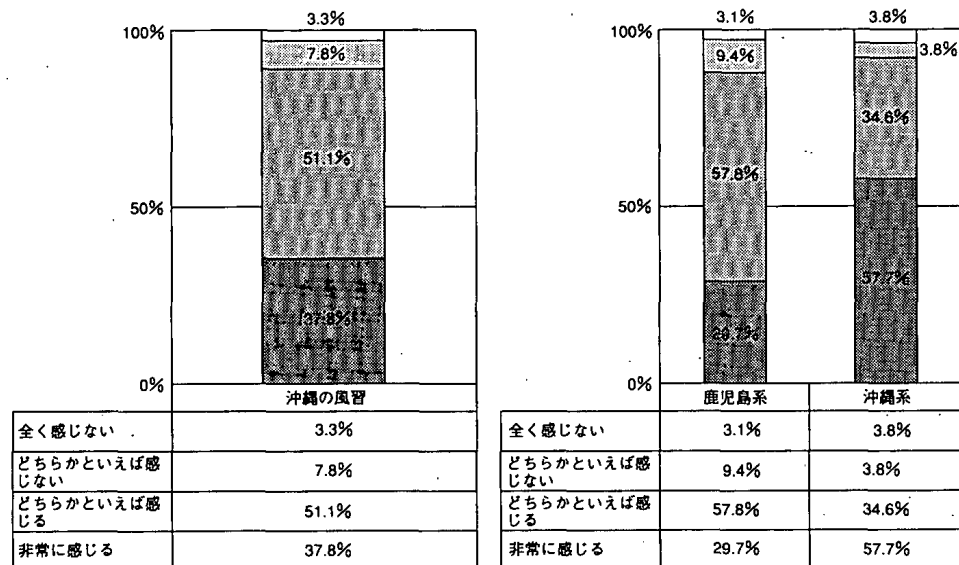


問16

c 沖縄の食べ物

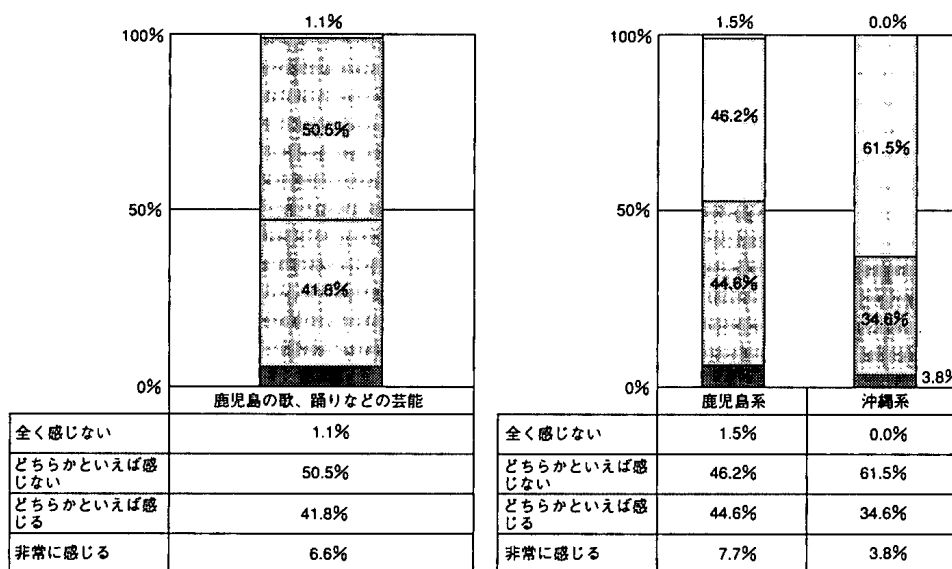


d 沖縄の風習

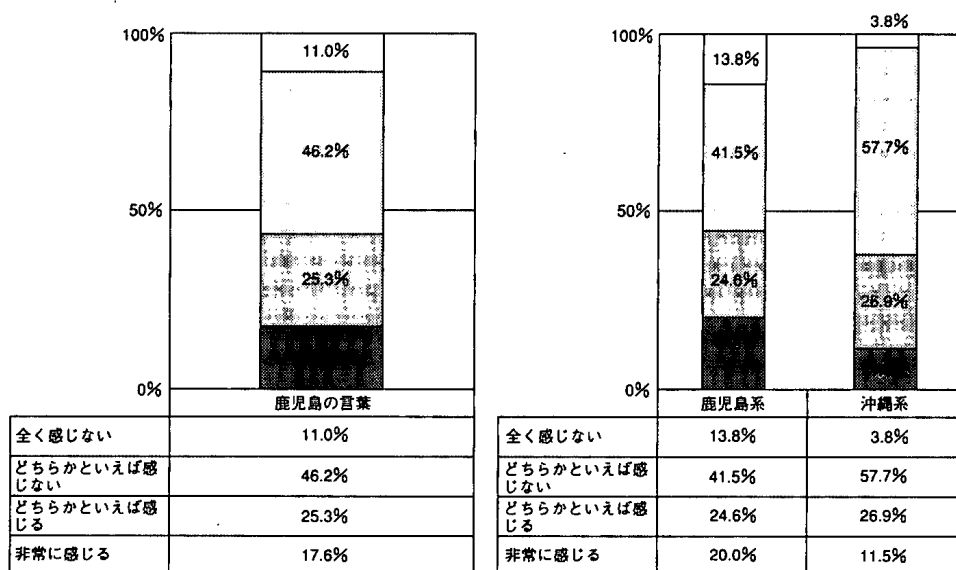


問17 あなたは次にあげるものに、どれだけ愛着や親近感を感じますか？

a 鹿児島県の歌、踊りなどの芸能

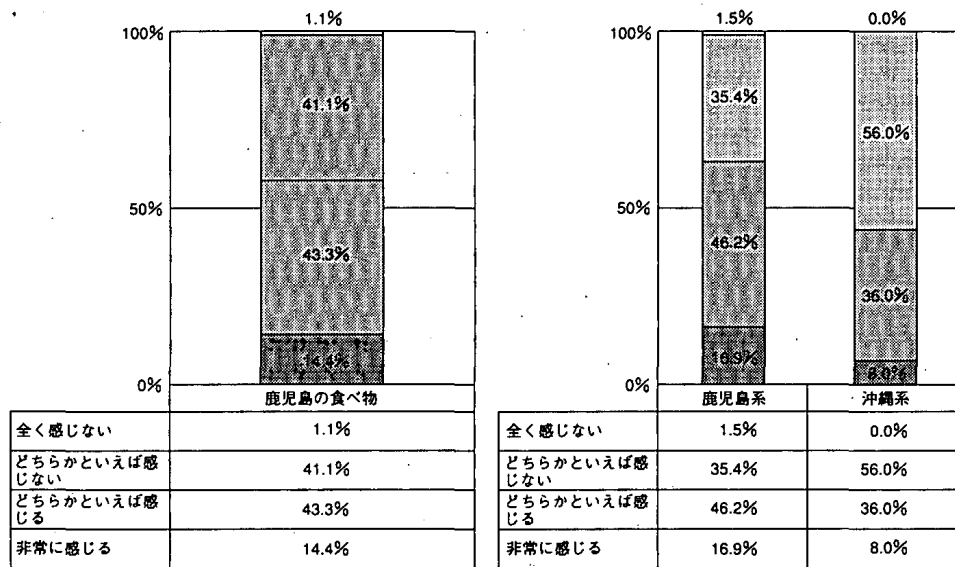


b 鹿児島県の言葉

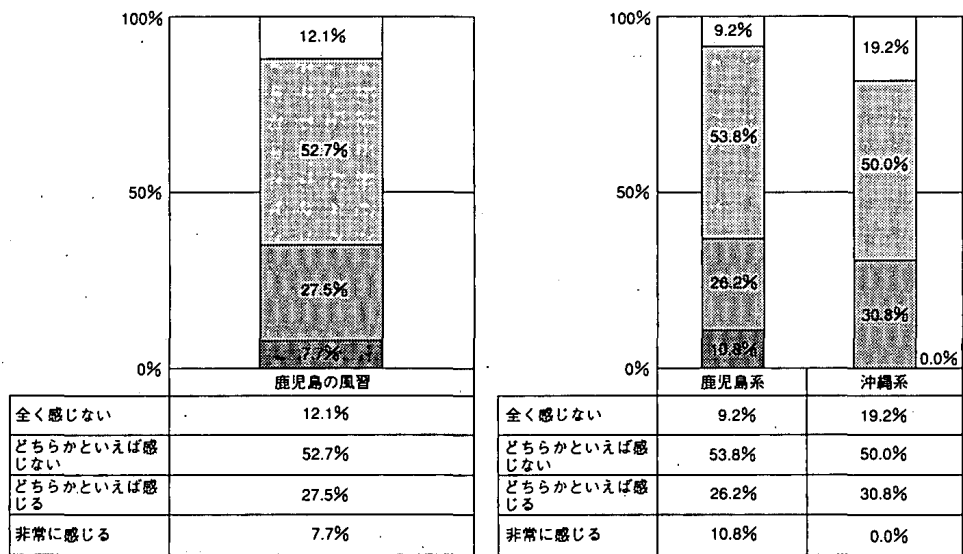


問17

c 鹿児島県の食べ物



b 鹿児島の風習



ティティは出自によるアイデンティティとは必ずしも同質ではない。政治の歴史とは別に、沖永良部島にはその地域における文化の歴史がある。薩摩藩直轄領になった後も、そして鹿児島県に行政的に組み入れられた後も、沖永良部島は沖縄島からの文化的影響を受け続けていた。特に芸能文化は沖縄の影響が強く、沖永良部島の人々が沖縄に文化的アイデンティティをもたせる大きな要因となっている〔高橋二〇〇一、二〇〇二c〕。

V 結

本稿では、沖永良部島のもつ「鹿児島／沖縄」の境界性に注目し、政治の歴史が人々のアイデンティティにどのような影響を与えているのかを考察した。「鹿児島／沖縄」の境界性は、沖永良部島を取り巻く「薩摩／琉球」の権力のせめぎあいという大きな政治の歴史と深く関連していた。その歴史の産物の一つとして、現在は鹿児島県と沖縄県の境界が沖縄島と与論島間に引かれている。だが、政治の歴史が残したものは行政の境界だけではなかった。沖永良部島という一つの島の歴史の中にも痕跡を残し、人々のアイデンティティに影響を及ぼしていた。

沖永良部島には沖縄系出自の親族集団が権勢を揮った時代と鹿児島系出自のシュータと呼ばれた人々が権力の中樞を占めた時代があった。沖縄系の出自を自認する人々の始祖は、一四世紀頃に溯る。永良部世の主を中心とする親族集団は、三山時代から琉球王国時代を経て薩摩藩直轄領であった近世

の中期頃までその権力の中枢を占めた。しかし薩摩藩直轄領時代の後期になると、藩役人と沖永良部の女性の子孫である鹿児島系の人々へと権力が移行していった。藩役人と各集落の有力者が娘を藩役人の現地妻にし姻戚関係を結びその勢力を強化し、その子孫がシュータという社会的地位の高い複数の親族集団を形成していった。明治以降もこれら鹿児島系の人々は島の政治的権力を維持し戸長、村长、町長などを歴任し、行政に大きな影響を与えた。

現在でも沖縄系、鹿児島系を自称するこれらの人々は、祖先崇拜に支えられ出自によるアイデンティティを強く意識することが多い。一般的には、沖縄系出自の人々は沖縄に、鹿児島系の人々は鹿児島にアイデンティティを求める傾向がある。近世に薩摩藩の役所が設置され発展していった和泊集落とその隣の手々知名集落には藩役人の子孫が多く住み、権力が集中する地域として「シュータジマ」を形成していった。そして、これらの集落の人々は他の集落の人々を差異化するようになった。シュータジマを政治の中心とする和泊町は知名町に対し、優位性を含みアイデンティティを持つようになった。そして、全体的には、鹿児島系の人々が多く住む和泊町には、知名町より鹿児島に帰属意識を持つ人が若干多いという結果をもたらしている。

また、文化的アイデンティティに注目すると、出自、町、集落を問わず、一般的には沖永良部島の人々は、沖縄の文化に対する愛着や親近感を強く持っており、出自によるアイデンティティとの異質性を示唆している。沖永良部島の人々が、沖縄に文化的なアイデンティティを求める傾向にあるとい

うことは、筆者の行った質問紙調査結果にも表れており、それはまた、しばしば人々の会話にも表れる「えらぶは文化的に沖繩に属する」という内容の言説とも符合する。

多くの場合これらの要因が複雑に絡み合い、人々は沖繩と鹿児島両方に属しているようで完全にはどちらにも属していないようなアンビバレントな感情を併せ持っている。そしてそれは、「鹿児島／沖繩」の境界を状況に応じて行き来するという境界地域の人々に特徴的な「ボーダー・アイデンティティ」といえる。

本研究は、従来のアイデンティティ論の問題性を指摘し、新たなアイデンティティ論の構築を試みるものである。本稿では国家対マイノリティという構図におさまらない沖永良部島の「鹿児島／沖繩」の境界性を反映した出自によるアイデンティティ、集落のアイデンティティ、そして町民としてのアイデンティティ、文化的アイデンティティに注目し、重層的なアイデンティティの歴史的構築性を明らかにした。今後はその他の境界性の性質や生成過程およびアイデンティティに及ぼした影響に関する研究が課題となる。また、本研究が「境界性」という新たなアプローチを提示することによって、「伝統」文化中心であった奄美・沖繩研究の幅を広げることの一助となれば幸いである。

謝辞

本稿執筆に際し、先田光演氏、前利潔氏をはじめ沖永良部島の皆様には多くのご協力をいただきま

した。また、質問紙調査の作成に御教示頂いた山田真茂留先生、後藤乾一先生、調査のデータ入力に協力して頂きました高橋良夫氏に感謝致します。そして、草稿を読んで貴重なコメントをいただいたスチュアート・ヘンリ先生と早大の比較文化論ゼミ生の皆様に感謝いたします。

注

(1) 琉球王国成立以前の時代。沖縄島北部中部南部を中心に力をもつ按司(豪族)が存在し、山北(北山)、中山、山南(南山)と称し王を名乗る存在であった。沖永良部島は沖縄島北部の今帰仁城を拠点とした北山(三北)王の勢力下であり王の息子真松千代は領主「世の主」として島を治めたとされる。

(2) 他に Linda Baschi 他に *The Nations Unbound* (1994) などがある。カルチュラルスタディーズの領域では Mae Henderson 編の *Borders, Boundaries, and Frames* (1995) や Homi Bhabha の *The Location of Culture* などがある。

(3) アメリカとメキシコの国境地域の研究には、前述のアンザルドウアの他に Alvarez, Robert R. (1995) “The Mexico-US Border: The making of an Anthropology of the Borderlands” や Barry, Tom, Harry Browne and Beth Sims (1994) の *Crossing the Line: Immigration, Economic Integration, and Drug Enforcement on the U.S.-Mexico Border* がある。

(4) クォータ (quota) 法とは、ある特定の母集団における関心のある下位集団を定め、母集団の構成比率にあ

わせてサンプルを抽出するが、その抽出は有意抽出で選ぶ方法である。例えば、男女を比較する場合にサンプル数を男女同数になるようにサンプルを抽出する。

- (5) 調査を開始した二〇〇一年八月一日現在の全人口は一五二三人で、結果として沖永良部島の全人口から対象外となったのは、鹿児島県沖永良部合同庁舎および沖永良部事務所の職員、鹿児島県の教職員、鹿児島県警沖永良部警察署の警察官、航空自衛隊第五警戒群の自衛官など転勤で一時的に沖永良部島に住んでいる人々でその人数は六〇〇人前後であった(筆者調べ)。よって、母集団は約一四五〇〇人と推定される。
- (6) その語源は、フロイトがブナイ・ブリース協会へ宛てた書簡の中で、「われわれユダヤ人としての内的同一性をともにしあう者は…」という文脈で用いた「内的同一性 (inner Identität)」という言葉にあるという(小此木一九八九・四一九)。日本語に訳しにくい言葉であるが、一般的には「自己同一性」、「同一性」などと訳されている。

- (7) 一七〇六(宝永三)年二月二〇日に、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島の四島に対して藩庁が発した系図取り上げの命が「大島政典録」に記されている。

- (8) 『おもろさうし』は、一二世紀ごろから一七世紀初頭にわたって謡われた、奄美、沖縄の島々の古謡ウムイを、首里王附が一六世紀から一七世紀にかけて再録し、編集した歌謡集で、一五五四首のオモロがおさめられている。古事記、万葉集、祝詞をあわせたものにあたる沖縄最大の古典でもある。オモロはウムイ(思い)が語形変化したものである(外間一九八六・一二七)。

(9) ただし、最後の歌の訳は、先田光演『沖永良部島の世之主伝説』(一九九七・三一)がより適訳と考え先田の訳を参照。

(10) 文書に年代が記されていないが、一七四四年頃の与人に仁志平という人物がおり、当調書の与人西平と同一人物と考えられる。

(11) 『徳之島郷土研究会報』第二号に掲載されている。

(12) 和泊町誌には「徳之島世之主由緒記」、先田光演『沖永良部島の世之主伝説―資料と解説―』には「竇満家系図」として掲載されているが同一文書。また『奄美大島諸家系譜集』亀井勝信編に記録されている。

(13) 『奄美郷土研究会報』第二〇号に掲載されている。

(14) 大親とは大屋子と同義の官職名である。

(15) 永吉によると、「共有地を配当された農民はすべて夫役といって、男子一五歳から六〇歳まで、女子一三歳から五〇歳までの者は皆労力の貢をする制であった。夫役に従事する者を作用夫または現用夫といい、兵役、輪卒をはじめ、池溝、道路、などの修繕造営から田畑の復旧、租年貢の運搬、藩吏巡回の際の労役はもとより、俸給の一部として吏員の使用にまで使役された。したがって農民は一年の過半はこの夫役に従い、自己の農作に入念する日数は極めて僅少であった」(永吉一九八五・三八〇)とされる。

(16) 和集落の前家^{すすめ}の屋号。和集落のメーアタイ(地域)は大福家と前家の親族集団からなり通婚も盛んで、ほとんどが縁戚関係にある。

(17) 集落内婚が奨励されていた一九五〇年代までとは異なり、集落はもちろん町外、島外の結婚により特に女性の移動が活発になった。

(18) ただし、質問紙調査の行った時期は、市町村合併問題が十分議論されていない段階であったことを考慮しなくてはならない。二〇〇二年一月ごろから本格的議論が行政主導で始まり、研究会などが発足した。現在、沖永良部、与論を一町へ統合するかが検討されており、現実的に沖縄へ属するというオプションはない。

引用文献及び参考文献

江渕一公

二〇〇〇 『文化人類学・伝統と現代』、東京：放送大学教育振興会。

太田好信

一九九八 『トランスポジションの思想』、京都：世界思想社。

二〇〇一 『民族誌的近代への介入』、京都：人文書院。

甲東哲

一九九五 『海と稲と巫女は語る』、鹿児島：ノア企画制作。

一九八七 『島のことば・沖永良部島』、鹿児島…三笠出版。

小此木敬吾

一九八九 『フロイト』、東京…講談社。

金明美

二〇〇〇 「日本におけるエスニシティ論の再検討…バウンダリー論を中心として」『民族学研究』六五(一)、東京…日本民族学会、七八―九三。

先田光演

一九九〇 『沖永良部島の歴史』、自家出版。

一九九七 『沖永良部島の世之主伝説・資料と解説』、自家出版。

スチュアート・ヘンリ

二〇〇二 『民族幻想論』、大阪…解放出版社。

スチュアート・ホール

二〇〇一 「誰がアイデンティティを必要とするのか？」『カルチュラルアイデンティティの諸問題、誰がアイデンティティを必要とするのか？』スチュアート・ホール&ポール・ドウ・ゲイ編、宇波彰他訳、東京…大村書店、七・三五。

スチュアート・ホール&ポール・ドウ・ゲイ編

二〇〇一『カルチュラルアイデンティティの諸問題誰がアイデンティティを必要とするのか?』
宇波彰他訳、東京：大村書店。

高橋孝代

二〇〇一「沖永良部島における「沖繩」芸能文化の受容と背景」『民俗芸能研究』三三、東京：民俗芸能学会、四四―七七。

二〇〇二^a「沖永良部島の芸能と沖繩―アイデンティティを探して―」『沖繩タイムス』
一月九日、一〇日、一日、一五日、一六日、那覇：沖繩タイムス社。

二〇〇二^b「奄美・沖永良部島の踊り神」『南島研究』四三、東京：南島研究会、九―二〇。

二〇〇二^c「沖永良部島民のアイデンティティと芸能・エイサーの意味」『文化人類学研究』
三、東京：早稲田大学文化人類学会、一六六―一八八。

高良倉吉

一九九三『琉球王国』、東京：岩波書店。

一九八七『琉球王国の構造』、東京：吉川弘文館

知名町編

一九八二『知名町誌』、鹿児島：知名町役場。

床呂郁也

二〇〇二 「越境」『文化人類学最新術語一〇〇』綾部恒雄編、東京：弘文堂、三二―三三。

永吉毅

一九八五 「中世」『和泊町誌歴史編』和泊町編、鹿児島：和泊町役場、一二七―一四〇。

原知章

二〇〇〇 『民俗文化の現在』、東京：同成社。

星野命

一九八五 「民族的帰属意識―エスニックアイデンティティの任意性」『文化人類学二特集 民族とエスニシティ』、京都：アカデミア出版。

松井健

一九八九 『琉球のニューエスノグラフィ―』、京都：人文書院。

村田光二

二〇〇〇 「集団間認知とステレオタイプ」『複雑さに挑む社会心理学』（亀田達也・村田光二著）、東京：有斐閣、一九九・一三六。

我妻洋

一九九四 「アイデンティティ」『文化人類学事典』石川栄吉他編、東京：弘文堂、二二三。

和泊町編

一九八五 『和泊町誌・歴史編』 鹿児島県和泊町教育委員会。
和泊町編

一九五六 『沖永良部島郷土史資料』 鹿児島県和泊町役場。

文書およびその他の文献資料

安藤佳翠一九五一「アドマイ、アカタジの沿革とワドマイシュータの消長」
衛藤助治一九一四「沖永良部誌」記録書

「沖永良部島代官系図」 記録書

『おもろさうし』外間守善校注 岩波書店

要家所蔵文書（家譜、知行目録）

金城家所蔵文書（家譜、文書）

「徳之島世の主由緒書（賓満家系図）」

「雑書由緒記写」

「八十八呉良謝佐栄久由緒記」

「世乃主かなし由緒記」一八五〇

「世の主の由来記」一七一一

「世の主由来与人西平調書」一七四四

英文参考文献

Alvarez, Robert R.

1995 "The Mexico-US Border : The making of an Anthropology of the Borderlands" in
Annual Review of Anthropology Vol.24, pp.447-470.

Anzaldúa, Gloria

1987 *Borderlands/La Frontera : The New Mestiza*, San Francisco : Spinter/Auntlute

Barry, Tom, Harry Browne and Beth Sims

1994 *Crossing the Line : Immigration, Economic Integration, and Drug Enforcement on the
U.S.-Mexico Border*, Albuquerque NM : Resouce Center Press.

Barth, Fredrik

1969 *Ethnic groups and Boundaries : The Social Organization of Cultural Differences*, Boston : Little Brown and Company.

Baschi, Linda, Nina G. Schiller and Cristina S. Blanc

- 1994 *Nations Unbound : Transnational Projects, Postcolonial Predicaments, and Deterritorialized Nation-States*. Langhorne : Gordon and Breach Publishers
- Bhabha, Homi
- 1994 *The Location of Culture*. New York : Routledge
- Cohen, Abner
- 1974 "Introduction : The Lesson of ethnicity". In *Urban Ethnicity*. Abner Cohen (ed.) , pp. ix-xxiv, London : Tavistock.
- Erikson, Erik Homburger
- 1950 *Childhood and Society*. New York : W.W.Norton & Company, INC.
- 1958 *Young Man Luther*. New York : W.W.Norton & Company, INC.
- 1959 *Identity and the Life Cycle : selected paper*. New York : International University Press
- 1968 *Identity : Youth and Crisis*. New York : W.W.Norton & Company, INC.
- Henderson, Mae G editor
- 1995 *Borders, Boundaries, and Frames : Essays In Cultural Criticism and Cultural Studies*, New York : Routledge.

Isaacs, H.R.

1975 “Basic Group identity : the idols of the tribe”. In *Ethnicity: Theory and Experience*.
N. Glazer and D.P. Moynihan (eds.) , pp29-52. Harverd University Press.

Takahashi, Takayo

1997 *Ethnic Identity of Okinoerabu Islanders*, San Francisco : Master's Thesis submitted
to San Francisco State Univrsity .